

<報 告>

経済学部創立70周年記念行事：  
Professor Diane Elson 講演会ならびに  
International Seminar: “Feminism and Economy”  
(10月19・20日開催)

姉 齒 暁

10月19日(土)、経済理論学会との共催により、イギリスのエセックス大学名誉教授である Professor Diane Elson による講演会が、そして翌20日(日)にはお茶の水女子大学の大学院生や海外からの研究者の参加を得て国際セミナー及びワークショップが開催された。

Professor Diane Elson は1968年オックスフォード大学で哲学政治経済学士号を取得、1994年にマンチェスター大学の博士号を取得し、オックスフォード大学、ヨーク大学、サセックス大学、マンチェスター大学で教鞭をとり、1995年にマンチェスター大学教授に就任。2000年よりエセックス大学の社会学部教授を務め、Emeritus(名誉教授)となったのちも、NPO 団体である UK Women’s Budget Group (ジェンダー平等や貧困な状態に置かれる女性たちに対するイギリス政府の財政政策の影響を検証する研究者、労働組合、フェミニスト活動家など広範な市民間のネットワーク)の責任者として、最も忙しい日々を送る Emeritus の一人と言われている。

氏はまた、グローバリゼーション、多国籍企業、国際貿易、マクロ経済政策、開発、人権とジェンダー平等の関連に関する研究において最も影響力のある研究者として知られており、フェミニスト経済学の創設ならびにその発展に貢献し、UNIFEM、UN Women、UNDP といった国連機関の委員や顧問を歴任

し、2016年には The Leontief Prize for Advancing Frontiers of Economic Thought を受賞、2017年にはオープンユニバーシティの名誉博士号が授与されている。さらに、" Male Bias in the Development Process, Contemporary Issues in Development Studies, Manchester University Press,1991. と "Feminist Economics for Trade", Routledge 2007. の二冊の著書に対して、2018年度の The JSPE - Routledge International Book Prize が授与されている。

以下、講演会ならびに国際セミナー当日の概況を記す。

## 1、経済理論学会第67回大会及び経済学部創立70周年記念講演

Diane Elson “Intersections of Gender and Class in the Distribution of Income”

### 1-1, 参加状況

19日開催の講演会には国内から約300名超、海外からダイアン・エルソン氏の来日に同行した研究者を含めて約60名の参加を得た。また、国内外の大学院生、本学学生を始め、国内他大学の学生たちが数多く参加したこと、本学学部及び大学院卒業生の参加も見られたことをあわせて報告するものである。

### 1-2, 講演内容

エルソン教授の研究対象は、経済政策ならびに社会政策、そして人権の確立、特にジェンダー関係が経済成長や開発に与える政治経済的効果を明らかにすることに向けられてきたが、この講演会では所得分配における「ジェンダーと階級」の共通性について語られた。

講演内容は4つのセクションに分けられる。第1セクションではトマ・ピケティのベストセラー”Capital in the Twenty-First Century”（フランス語版原著から Arthur Goldhammer が英語翻訳、日本語版は英語版から訳したもの。

邦題『21世紀の資本』山形浩生、守岡桜、森本正史訳、みすず書房、2014年初版）をジェンダーの視点で見直すことによって、資本主義はピケティが言うところの「世襲資本主義 = patrimonial capitalism」であるとともに、「家長制的 = patriarchal」なものでもあることが示される。

第2セクションでは「賃労働にたずさわる女性が多くなればなるほど平等度が増す」と言う OECD の調査結果を検証している。

第3セクションでは、女性労働力の増大は「資本—労働者間の不平等度」の拡大と関連していることを、そして最後となる第4のセクションではジェンダー及び階級間の不平等度を改善するための戦略を示すという内容となっている。

フェミニスト経済学において、ジェンダーは階級など他の不平等な権力構造と絡みあう不平等な社会的権力として理解される。この見方によれば、当該個人のジェンダーとは、その個人がいかなる階級を経験するのかといった社会的ステータスを決定し、同時に当該個人の階級はその個人がいかなるジェンダーを経験することになるのかを規定することになる。従って、エルソン氏の分析はこの視点に立って展開される。

エルソン教授の講演はピケティが資産収益率  $r >$  経済成長率  $g$  (生産性成長率と人口に依存する) の結果として所得格差が拡大するとした単純な結論を次のように批判する。第1に、出生率の決定要因として公的サービスや労働機会、従って収入を得る機会といった社会制度上の条件が存在し、むしろこれに依存する形で人口が決まる。第2に、資本はこれまで労働力の再生産費用を無償で行われる家事労働やコミュニティに外部化させることで賃金を抑制し利潤を増大させてきたのであって、女性の労働市場への参加度の上昇はこれと矛盾する。第3に、オフショアリングならびに移民は労働力の再生産費を外部化するものである。エルソン教授は、ピケティが掲げる単純な定式ではこれらの要素は包摂し得ていないと批判する。

また、賃労働に携わる女性の増大は所得格差を解消させる効果があるのかという点について、エルソン教授は日本とイギリスの Gini 係数と女性労働

力の増加分との相関関係を示し、日本でもイギリスでも、女性の有給での労働の増加分は所得格差を解消することはなかったと結論づける。性差別が存在する以上、労働市場ではこれを利用して利潤を拡大していくのであって、逆に労働分配率の低下こそが女性の労働市場への参入率を増大させているのである。すなわち、女性の賃金が低く抑えられているのは性差別の存在あってのことであり、それは女性の労働参加率の上昇をもたらすが、当初より賃金差別が存在する以上、女性の労働参加率の上昇が所得格差を解消することには繋がらないのである。

そして、最後にジェンダーの不平等度を減少させるために必要なことが示される。第1に、労働組合や女性による自主的な組織を支持し、低賃金で働く女性労働者の交渉力を強化すること。第2に、最低賃金を「人並みの生活ができる程度」にまで上昇させ、法制化を進めること。第3に、公共部門の雇用を増大させること。第4に介護サービスへの公共投資を行うことが必要である。介護サービスへの投資はよくいわれることではあるが、それが公共資産の増大をもたらし、私的な資産の増大に歯止めをかけることにつながるものであり、それは同時に家庭に縛り付ける介護労働から女性たちを解放することにつながる。同時に、介護サービスへの投資は、建設業への投資が生み出す雇用よりはるかに多くの雇用を生み出すので、女性の雇用機会を増やすことに効果的である。しかしそのためには介護労働のための公共投資と公共部門の雇用増大がリンクされなければならないのである<sup>1</sup>。

以上が、エルソン氏の報告の概要である。

---

<sup>1</sup> Elson, D.2018. *Intersections of gender and class in the distribution of income*. “The Japanese Political Economy” London. Routledge および、ダイアン・エルソンが大会報告時に使用したパワーポイント、武蔵大学の横川信治氏によるダイアン・エルソンの講演用原稿の要約を参照した。

## 2. 経済理論学会第 67 回大会及び経済学部創立 70 周年記念企画

International Seminar: “Feminism and Economy”

### 2-1, セミナー概要

20 日に開催された国際セミナーでは、Professor Diane Elson を助言講師に迎え、若手研究者が「フェミニズムと経済」と題して報告と討論が行なわれた。海外からの出席者、本学内外の院生、学部生、社会人等、約 50 名の参加を得て、いずれも英語であるが活発なやりとりが行われた。まず大学院生等から報告が行われ、その後、エルソン氏が近年のフェミニズム経済学の関心対象について語るとともに、予定時刻を超えて若い参加者との意見交換が活発に行われた。

### 2-2, 報告ならびに討論の概要

報告は金融セクターにおける ICT 労働の導入とその拡張で生じうる問題を抽出し、その経済学上の位置付けを考えるものや対人的サービス業の労働過程に関わるアクター間の関係性を分析するものであった。これらの報告内容についてはこれらの意見交換を生かして今後さらに研究を展開していくことが予定されている。

会場から出された質疑、意見は次のとおりである。過去の技術的变化が女性労働を含む労働形態に与えた影響、ICT による労働形態の変化との対比ならびに金融部門における女性労働の特質、また対人的労働サービスそのものの捉え方やいわゆる感情労働との関係性などについてである。

## まとめ

経済理論学会との共催による以上の行事には、駒澤大学在学中の学生や院生、卒業生も参加しており、関心の高さが見て取れた。また、大学間の交流

はもちろん、エルソン氏のもつフェミニスト経済学者や活動家、労働経済学、経済理論分野、ならびに女性労働が多く関係するサービス労働分野の現状分析に携わる国内外の若い研究者同士のネットワーク形成にも繋がるなど、多くの成果を上げることができた。